

ロシア語における形容詞と名詞の連続性： 先行詞としての所有形容詞に着目して*

宮内拓也

《要旨》

品詞分類は形態的基準、統語的基準、意味的基準に基づいて行われるとされるが、品詞の境界は必ずしも離散的なものではなく、しばしばその中間的な存在の指摘がなされており、品詞間には一定の連続性が認められる。本稿では、特に所有形容詞が代名詞の先行詞となる現象に着目し、ロシア語における形容詞と名詞の連続性について議論する。具体的には、品詞分類上は形容詞に属す所有形容詞が代名詞の照応先となり得るという点で、他の形容詞に比べ名詞に近い振る舞いを示すことを指摘し、意味機能的観点から所有形容詞が形容詞と名詞の間に位置づけられる中間的存在であること、すなわち形容詞と名詞との間に連続性が示唆されることを示す。さらに、形態的、統語的な他のいくつかの現象に関しても若干の検討を加えた上で、形容詞と名詞は厳密に離散的な境界を有するものではなく、その中間的存在である所有形容詞の存在によって、連続性を有するものであることを示す。

《キーワード》

ロシア語、所有形容詞、形容詞、名詞、連続性、指示、照応

1. はじめに

品詞分類は形態的基準、統語的基準、意味的基準に基づいて行われるとされる (Lyons 1977: 425 など) が、このように分類の基準が複数の観点から構成されていることから推察されるように、品詞の境界は必ずしも離散的なものではなく、その中間的な存在の指摘がなされている (Пешковский 1956, Corbett 1978, 匹田 2007 など)。つまり、品詞間には一定の連続性が認められる。実際に、現代ロシア語の品詞分類において、形容詞 (имя прилагательное) と名詞 (имя существительное) は別の品詞に属しているが、共により大きな語類である名辞類 (имя) に属しており、これは名辞類が性、数、格という形態論的カテゴリーを共通して持つことに起因すると考えられる。

* 本研究は JSPS 科研費 23K12155 (研究代表者：宮内拓也)、18K00526 (研究代表者：匹田剛) の助成を一部受けている。また、執筆にあたり査読者、および編集委員の一人より大変示唆に富む重要なご指摘をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。

宮内拓也：北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院・講師



本稿は、特に所有形容詞（物主形容詞；*притяжательное прилагательное*）¹が代名詞の先行詞となる現象に着目し、ロシア語における形容詞と名詞の連続性について議論するものである。品詞分類上は形容詞に属す所有形容詞が代名詞の照応先となり得るという点で、他の形容詞に比べ名詞に近い振る舞いを示すことを指摘し、意味機能的観点から所有形容詞が形容詞と名詞の間に位置づけられる存在であることを示す。さらに、形態的、統語的な他の現象に関しても若干の検討を加えた上で、形容詞と名詞は厳密に離散的境界を有するものではなく、その中間的存在である所有形容詞の存在によって、連続性を有するものであることを示す。

本稿の構成は以下のとおりである。まず、2では本稿の議論の前提をいくつか確認する。3では、本稿の最も中心的なテーマとして、所有形容詞が代名詞の先行詞として機能することを指摘し、意味機能的観点から所有形容詞がその他の形容詞と名詞の中間的存在であること、すなわち形容詞と名詞との間に連続性が示唆されることを示す。さらに、4では形態的、統語的観点から他の現象に関して検討し、形容詞と名詞は連続性を有するものであることを示す。5は本稿全体のまとめである。

2. いくつかの前提

本節では本稿の議論の前提をいくつか確認する。以下2.1では、ロシア語の品詞分類について概観し、特に形容詞と名詞が別の品詞に属すことを確認する。2.2では、品詞分類の際の基準について、形態的、統語的、意味的なものが想定されていることを示す。

2.1. ロシア語における品詞分類

現代ロシア語における代表的な品詞分類では、語は名詞、形容詞、数詞、代名詞、副詞、動詞、前置詞、接続詞、助詞、間投詞の10のカテゴリーに分類される（*Виноградов 1947, Виноградов и др. 1960, Шведова 1970, Шведова и др. 1980*など）。例えば、*Шведова и др. (1980: 455)*では(1)の通り、*Виноградов (1947: 39)*では(2)の通り述べられている。

- (1) В современном русском языке существует десять частей речи: 1) имя существительное;
- 2) местоимение-существительное; 3) имя прилагательное; 4) имя числительное; 5) наречие; 6) глагол; 7) предлог; 8) союз; 9) частицы; 10) междометие.

「現代ロシア語では10の品詞がある：1) 名詞；2) 代名詞；3) 形容詞；4) 数詞；5) 副詞、6) 動詞；7) 前置詞；8) 接続詞；9) 助詞；10) 間投詞。」

(*Шведова и др. 1980: 457*)

¹ *Притяжательное прилагательное* は物主形容詞とも訳されるが、本稿では所有形容詞とする。

(2) В традиционной русской грамматике, отражающей влияние античных и западноевропейских грамматик, сначала насчитывалось восемь, затем девять, теперь же — со включением частиц — обычно выделяется десять частей речи:

1) имя существительное; 2) имя прилагательное; 3) имя числительное; 4) местоимение; 5) глагол; 6) наречие; 7) предлог; 8) союз; 9) частицы и 10) междометия.

「伝統的なロシア語文法では、古代や西欧の文法の影響を反映して、最初は 8 つ、次に 9 つ、そして現在は助詞を含めると、通常 10 の品詞が区別される：

1) 名詞；2) 代名詞；3) 形容詞；4) 数詞；5) 副詞、6) 動詞；7) 前置詞；8) 接続詞；9) 助詞；10) 間投詞。」
(Виноградов 1947: 39)²

上記の通り、より上位の名辞類というカテゴリーに共に属すものの、ロシア語では形容詞と名詞は通常別の品詞とされる。本稿においても形容詞と名詞は別の品詞であることを前提に、その連続性について議論する。

2.2. 品詞分類とその基準

品詞分類においては、ある語をどの品詞とするのかの基準が必要となるが、この品詞分類上の基準に関して例えば Lyons (1977: 425) は、形態的 (morphological)、統語的 (syntactic)、意味的 (semantic) な 3 つのレベルを想定することを述べている。ロシア語においても、Шведова и др. (1980: 455) が明示的に (3) の形で述べているように、品詞分類における基準として、形態的、統語的、意味的なものが想定されている。

² 「最初は 8 つ、次に 9 つ」とあるが、例えば Ломоносов (1755: 26) では名詞、代名詞、動詞、形動詞、副詞、前置詞、接続詞、間投詞の 8 つの品詞が、Греч (1827: 25) では名詞、形容詞、代名詞、動詞、形動詞、副詞と副動詞、前置詞、接続詞、間投詞の 9 つの品詞が示されている。また「古代や西欧の文法の影響を反映して」とあるが、これはトラクス (Θραξ) の『文法の技法』(Τέχνη Γραμματική) 等で示される古典ギリシア語文法における 8 つの品詞 (名詞、動詞、分詞、冠詞、代名詞、前置詞、副詞、接続詞) やその影響を受けたとされる例えばプリスキアヌス (Priscianus) の『文法学教程』(Institutiones Grammaticae) 等のラテン語文法の 8 つの品詞 (名詞、動詞、分詞、代名詞、前置詞、副詞、接続詞、間投詞) といった古典語の影響、さらにいわゆる『ポール・ロワイヤル文法』(Lancelot et Arnauld 1660) における 9 つの品詞 (名詞、動詞、分詞、冠詞、代名詞、前置詞、副詞、接続詞、間投詞) といった西欧語の品詞分類の影響の反映を指しているものと思われる。本稿では、ロシア語の品詞分類の歴史の変遷やロシア語の品詞分類における古典語や他の西欧語の影響については議論しない。西欧語における品詞論の展開については、Robins (1967) などを参照のこと。

- (3) Части речи — это грамматические классы слов, характеризующиеся совокупностью следующих признаков: 1) наличием обобщенного значения, абстрагированного от лексических и морфологических значений всех слов данного класса; 2) комплексом определенных морфологических категорий; 3) общей системой (тождественной организацией) парадигм и 4) общностью основных синтаксических функций.

「品詞とは、次の一連の特徴によって規定される、語の文法的なクラスである：

- 1) あるクラスのすべての語の語彙的および形態論的意味から抽象化された総括的な意味の存在、2) 明確な形態論的カテゴリーの複合体、3) パラダイムの共通のシステム（同一の構成）、4) 基本的な統語機能の共通性。」（Шведова и др. 1980: 457）

意味機能的な観点から、Croft（2003）は言語類型論の立場で語が持つ機能として指示（reference）、陳述（predication）、限定（modification）を挙げ、その各々に対応する典型的な品詞として名詞、動詞、形容詞を想定している。同様にロシア語においても、名詞は対象（предмет/предметность）を、動詞は過程（процесс）³を、形容詞は特徴（признак）を表すと一般化される⁴（Виноградов 1947, Виноградов и др. 1960, Шведова 1970, Шведова и др. 1980, Янко-Триницкая 1982, Шанский, Тихонов 1987, Шанский и др. 1988, Панова 2010, Карпов 2019 など）。本稿の議論に関わる形容詞と名詞について、例えば Шведова и др.（1980）はそれぞれ（4）、（5）の通り述べている。

- (4) Имя прилагательное — это часть речи, обозначающая непроецессуальный признак предмета и выражающая это значение в словоизменительных морфологических категориях рода, числа и падежа. Прилагательное обладает морфологической категорией степени сравнения и имеет полные и краткие формы.

「形容詞は、対象の非過程的な特徴を表し、その意味を性、数、格という語形変化上の形態論的カテゴリーで表現する品詞である。形容詞は比較の級の形態論的カテゴリーを持ち、長語尾形と短語尾形がある。」（Шведова и др. 1980: 540）

³ 動作（действие）、状態（состояние）ともされる。

⁴ これらが（3）における「あるクラスのすべての語の語彙的および形態論的意味から抽象化された総括的な意味」にあたる。

- (5) Имя существительное — это часть речи, обозначающая предмет (субстанцию) и выражающая это значение в словоизменительных категориях числа и падежа и в несловоизменительной категории рода.

「名詞は、対象（実体）を示し、その意味を数、格という語形変化上のカテゴリー、および性という非語形変化上のカテゴリーで表現する品詞である。」

(Шведова и др. 1980: 460)

本稿では、品詞分類の基準等の分類方法そのものについては扱わないが、形容詞と名詞の間の連続性を議論するにあたり、上記で述べたように形態的、統語的、意味的な基準により議論されることを前提とする。

3. 先行詞としての所有形容詞から見える形容詞と名詞の連続性

本節では、所有形容詞が代名詞の先行詞として機能することを指摘し、意味機能的観点から所有形容詞がその他の形容詞と名詞の中間的存在であること、すなわち形容詞と名詞に連続性が示唆されることを示す。以下 3.1 では所有形容詞について概観し、本稿の記述、考察の対象を定める。3.2 では、所有形容詞が先行詞として機能する現象を指摘し、3.3 では当該の現象は所有形容詞が指示性を持つことを意味しており、その点で名詞的な振る舞いをしていることから、形容詞と名詞との間に連続性が示唆されることを示す。

3.1. 所有形容詞とは

所有形容詞は、親族名称や人名等の名詞から派生する所有や帰属関係を表す形容詞⁵

⁵ 所有形容詞は主に口語で用いられるとされる (Валгина и др. 1966, Шведова и др. 1980, Молошная и др. 1989, Розенталь и др. 1994, Кобякова 2013 など)。また、所有形容詞は、関係形容詞に含まれると考える立場 (Виноградов и др. 1960, Шведова 1970, Шведова и др. 1980 など) と、含まれないとする立場 (Валгина и др. 1966, Виноградов 1947, Шанский, Тихонов 1987 など) があるが、この点はどちらの立場をとっても連続性を示すことに主眼を置いている本稿には本質的に影響はない。なお、関係形容詞とは、対象の特徴を他との関係性により表す形容詞である。対になるカテゴリーは対象の特徴を直接的に表す性質形容詞である。Шведова (1970: 306–307) は、関係形容詞については例として *железный* 「鉄の」、*оконный* 「窓の」、*надувной* 「空気で膨らます」、*отопительный* 「暖房の」、*бродячий* 「流浪の」などを挙げ、また性質形容詞については例として *белый* 「白い」、*красивый* 「美しい」、*низкий* 「低い」*прочный* 「丈夫な」、*умный* 「賢い」などを挙げ、それぞれ (i a, b) の通り示している。

- (i) a. Относительные прилагательные обозначают свойство предмета через отношение к другому предмету или признаку.

「関係形容詞は対象の特質を他の対象、特徴との関係を通じて表す。」

であり、例えば Исаченко (1965) は (6) の通り述べている。

- (6) К числу притяжательных имён прилагательных относятся слова, выражающие индивидуальную принадлежность, т.е. принадлежность одному определённом лицу. В этот разряд входят прилагательные типа *мамин, бабушкин, дядин*, образованные от названий членов семьи, а также прилагательные типа *Наташин, Ванин, Петин*, образованные от уменьшительных форм личных имён собственных.

「所有形容詞には、個人の所有、つまり 1 人の特定の人物の所有を表す語が属す。このカテゴリーには、親族名称から形成される「お母さんの」、「おばあさんの」、「おじさんの」のような形容詞や、個人を表す固有名詞の愛称形から形成される「ナターシャの」、「ヴァーニャの」、「ペーチャの」のような形容詞が含まれる。」

(Исаченко 1965: 179–180)

所有形容詞も他の形容詞と同様に名詞に性、数、格に関して一致を起こすが、形態法は他の形容詞とは異なる。⁶ また、所有形容詞は接尾辞 *-ов (-ев)*、*-ин (-ын)* を持っている点に形態的な特徴⁷がある。*-ов* を持つ所有形容詞は屈折タイプ I を持つ男性活動体名

-
- b. Качественные прилагательные обозначают качество предмета, свойство, которое может проявляться с разной степенью интенсивности, [...]

「性質形容詞は対象の性質、様々な程度の大小を伴って表される特質を表す。」

(Шведова 1970: 306–307)

ただし、関係形容詞と性質形容詞の区分は必ずしも明白でないこともあり、Townsend (1968: 210) や Шведова и др. (1980: 542–543) などで指摘されるように、関係形容詞が比喩的、転義的に性質形容詞的な意味を持ち得る。

- (ii) a. железный гвоздь
iron-NOM.M nail-NOM.M
「鉄の釘」

(Шведова и др. 1980: 542)

- b. железная дисциплина
iron-NOM.F discipline-NOM.F
「厳しい規則」

(Шведова и др. 1980: 543)

例えば、Шведова и др. (1980: 542–543) は、(ii a) の *железный* は関係形容詞として「鉄の」を意味するが、(ii b) の *железный* は性質形容詞的な「厳しい」という意味を持ち得ることを挙げている。

⁶ 具体的な所有形容詞の形態法については、4.1 を参照のこと。

⁷ 異形態の *-ев, -ын* については以降記載しない。また、*-нин* を持つものも所有形容詞とされるが、Шведова и др. (1980: 270) は例として *братнин* 「兄／弟の」、*мужнин* 「夫の」、*зятнин* 「娘／姉／妹の夫の」、*девернин* 「夫の兄の」、*дочернин* 「娘の」(廃語) を挙げ、*-нин* を持つ所有形容詞は非生産的であるとしている。さらに、Garde (1980: 224) は *-нин* を持つ所有形容詞は *братнин* と

詞から、*-ин*を持つ所有形容詞は屈折タイプ II を持つ男性、女性活動体名詞からそれぞれ形成される⁸ (Шведова и др. 1980: 269)。また、スタイルの点から Исаченко (1965: 219) は *-ов* を持つ所有形容詞は文体的にニュートラルな名詞から形成される一方で、*-ин* を持つ所有形容詞は文体的に「評価された (квалифицированные)」語、すなわち家庭生活で用いられるような口語的で親密な語から形成される⁹ ことを指摘している。

接尾辞 *-ий* を持つものも所有形容詞とする場合もあるが、*-ов*、*-ин* を持つ所有形容詞が個人の所有を表すのに対して、*-ий* を持つ形容詞は非個人、すなわちグループや種全体による所有を表す (Виноградов 1947, Исаченко 1965, Валгина и др. 1966, Шведова и др. 1980, Молошная и др. 1989 など) という指摘¹⁰ を踏まえた上で (6) に従うならば、*-ий* を持つ形容詞は所有形容詞でない¹¹ ことになる。

また、接尾辞 *-ов* と *-ин* については、その生産性に違いがある。*-ин* を持つ所有形容詞は生産性が高い一方で、*-ов* を持つ所有形容詞はより生産性が低いことが指摘されている (Виноградов 1947, Исаченко 1965: 219–220, Garde 1980: 222–223, Шведова и др. 1980: 267, Timberlake 2004: 127 など¹²)。よって、*-ов* を持つ所有形容詞が用いられる場合においても同様の議論が当てはまるものと思われるが、本稿で実例として検討していくのは基本的に *-ин* を持つ所有形容詞とする。

3.2. 先行詞としての所有形容詞

ある言語表現 A が、その後に見れる言語表現 B と同一の指示対象を持つとき、表現 A、

мужнин の 2 語しかなく、標準文語では用いられていないと述べている。よって、本稿ではこれは対象としない。

⁸ なお、屈折タイプ I には、*-а*、*-я* で終わるものと *путь* 「道」を除くほとんどすべての男性名詞、および *-мя* で終わるものと *дитя* 「子供」を除く中性名詞が属し (Шведова и др. 1980: 484)、屈折タイプ II には単数主格で *-а*、*-я* の語尾を持つすべての女性名詞、男性名詞、総性 (общий род) 名詞が属す (Шведова и др. 1980: 489)。

⁹ 例えば、*-ин* を持つ所有形容詞は *мать* 「母」ではなく *мама* 「お母さん」から、*отец* 「父」ではなく *папа* 「お父さん」から、*Иван* 「イヴァン」ではなく *Ваня* 「ヴァーニャ」から、*Владимир* 「ヴラジーミル」ではなく *Володя* 「ヴァロージャ」から形成されることを挙げている。

¹⁰ Исаченко (1965: 180) はこの事実から、*-ий* を持つ形容詞を「関係・所有形容詞 (относительно-притяжательные прилагательные)」と呼ぶことを提案している。また、上記指摘を踏まえれば、*-ов*、*-ин* を持つ所有形容詞は個体指示 (individual reference) の表現であり、*-ий* を持つ形容詞は総称指示 (generic reference) の表現であると考えられる。総称指示の表現は非指示的であるとも指示的であるとも考えられることがあり、総称指示表現である *-ий* を持つ形容詞に関する記述、さらには総称指示表現における指示性という理論的問題に関する検討は今後の課題としたい。

¹¹ よって、*-ий* を持つ形容詞は本稿では扱わず、本稿において所有形容詞は接尾辞 *-ов*、*-ин* を持つ所有形容詞のみを指すこととする。

¹² 特に Исаченко (1965: 220) は、*-ов* を持つ所有形容詞は現代ロシア語において消えかかっていると述べている。

B は照応関係にあると言われ、このとき表現 A を先行詞、表現 B を照応詞と言う。すなわち、(7) において *Маша* 「マーシャ」は照応詞である再帰代名詞 *себя* の先行詞である。

- (7) *Маша_i любит себя_i.*
Masha-NOM loves REFL.ACC
 「マーシャ i は自分自身 i を愛している。」¹³

所有形容詞は他の形容詞と異なり代名詞の先行詞となることができる (Babyonyshev 1997, Pereltsvaig 2007, 宮内 2022)。例えば、(8) では a, b 共に補文内の照応詞 *он* 「彼が」、*ему* 「彼に」は主文の *Колин* 「コーリヤの」の派生元の *Коля* 「コーリヤ」を指示¹⁴ することができ、*Колин* は *он, ему* の先行詞となる。¹⁵

- (8) a. *Колин_i друг думает, что он_i умный.*
Kolya's-NOM.M friend-NOM.M thinks that he-NOM smart-NOM.M
 「コーリヤ i の友人は彼 i が賢いと思っている。」
- b. *Колин_i друг думает, что ему_i нравится эта*
Kolya's-NOM.M friend-NOM.M thinks that him-DAT appeals this-NOM.F
книга.
book-NOM.F
 「コーリヤ i の友人は彼 i がその本を気に入っていると思っている。」

(宮内 2022: 79)¹⁶

¹³ 例にはグロスを付す。グロスの文法情報は議論に関係あるもののみ付すこととする。文法情報の略記は以下の通り：NOM = 主格、GEN = 生格、DAT = 与格、ACC = 対格、INS = 造格、LOC = 前置格、M = 男性、N = 中性、F = 女性、PL = 複数、INF = 不定形、REFL = 再帰代名詞、ADJ = 形容詞。なお、ロシア語の性の形態的な対立は単数のみで見られるため、単数では数を、複数では性を示さない。そのため、グロスにおいて性が示されていたら単数であることを含意する。また、出典が記されていない例は、筆者が作例して母語話者による文法性判断、容認性判断を受けたものである。

¹⁴ その意味では、(8) における指標 i は *Колин* そのものではなく、*Кол-ин* のように形態素境界を示した上で、*Кол-* に振るべきとも考えられるが、例文表記上は指標は語レベルに与えるものとする。以降も同様である。

¹⁵ なお、以下 (iii) の場合においては、*его* 「彼を」は *Колин* の派生元の *Коля* を指示することができず、*Колин* は *его* の先行詞とならないが、このことは束縛原理 (Chomsky 1981: 202) と名詞句の統語構造によって説明できる。詳細は Miyauchi (2020) や宮内 (2022) を参照のこと。

- (iii) **Колин_i последний фильм сильно его_i разочаровал.*
Kolya's-NOM.M latest-NOM.M film-NOM.M really him-ACC disappointed
 「コーリヤ i の最新の映画は本当彼 i がっかりさせた。」 (Miyauchi 2020: 181)

¹⁶ 例において、所有形容詞に対するグロス行の英語逐語訳ではしばしばなされているようにサクソ

また、Babyonyshev (1997) でも指摘されているように、所有形容詞は同一節内の照応詞の先行詞にもなり得る。(9) において照応詞の *свой* 「自分自身の」は所有形容詞 *соседкин* 「隣人の」の派生元である *соседка* 「(女性の) 隣人」を指示できる。

- (9) *соседкин_i рассказ о своих_i проблемах*
neighbor's-NOM.M story-NOM.M about self's-LOC.PL problem-LOC.PL
 「隣人_iの自身_iの問題_iについての話」 (Babyonyshev 1997: 203)

さらに、所有形容詞は (8) や (9) で見たような文内照応のみでなく、談話内照応 (文間照応) における先行詞となることも可能である。(10) では、照応詞 *она* 「彼女が」は *Надин* 「ナージャの」の派生元 *Надя* 「ナージャ」を指示しており、*Надин* は文を超えて先行詞として振る舞うことがわかる。

- (10) *Я принесла Надину_i книгу. Она_i просила её сегодня*
I-NOM brought Nadja's-ACC.F book-ACC.F she-NOM asked-F it-ACC today
вернуть.
return-INF
 「私はナージャ_iの本を持ってきた。彼女_iはそれを今日返すように頼んだ。」 (Babyonyshev 1997: 203)

3.3. 所有形容詞の指示性

照応詞の先行詞として機能するのは指示性 (referentiality) を持つ言語表現¹⁷ である。Croft (2003) が名詞の機能として指示を挙げていることなどからもわかるように、指示性を持つ典型的な品詞は名詞である。所有形容詞が照応詞の先行詞となり得るのは名詞と同様に指示性を持つためである。

一方でその他の形容詞は指示性を持たないため照応詞の先行詞となることはできない。(9) や (10) の場合とは異なり、(11a) においては *свой* 「自分自身の」は *соседский* 「隣人の」の派生元である *сосед* 「隣人」を指示することはできず、(11b) においても

ン属格 (Saxon genitive) を充てているが、無論これは例の表示上の便宜的な処理であり、英語におけるサクソン属格を形成する接語 *'s* とロシア語における所有形容詞を形成する接辞が必ずしも同一の意味機能を持つことは含意しない。以降も所有形容詞に対する英語逐語訳はサクソン属格を充てる。

¹⁷ 言語表現を外延に結び付ける性質を指示性と呼び、先行詞にこれが認められるために照応詞は先行詞を通じて外延の情報を得ることができると考えられる。2.2 で見たように、ロシア語学において名詞は対象を表すとされているが、これは機能の観点からみると、名詞が対象 (外延) への指示機能を持つことを表していると考えられる。

они「彼らが」も он「彼が」も *детский*「子供の」¹⁸ の派生元である *дету*「子供」を指示することはできない。

- (11) a. *соседский_i рассказ о своих_i проблемах
 neighborly-NOM.M story-NOM.M about self's-LOC.PL problem-LOC.PL
 「隣人_iの自身_iの問題についての話」
- b. Я принесла детскую_i книгу. { Они*_i просили / Он*_i
 I-NOM brought child-ADJ.ACC.F book-ACC.F they-NOM asked-PL he-NOM
 просил } её сегодня вернуть.
 asked-M it-ACC today return-INF
 「私は子供_iの本を持ってきた。{彼ら／彼}_iはそれを今日返すように頼んだ。」
 (Babyonyshev 1997: 203)

以上の通り、所有形容詞は指示性を持ち、照応詞の先行詞としての振る舞いを見せる。一般に他の形容詞は指示性を持たず、照応詞の先行詞にもなることができないことを考えると、この点で所有形容詞は名詞的な性質を持つと言える。これは、意味機能的観点から所有形容詞がその他の形容詞と名詞の中間的存在であることを意味しており、形容詞と名詞には連続性が認められることが示唆される。

4. 所有形容詞の形態的、統語的振る舞いから見える形容詞と名詞の連続性

本節では、形態的、統語的観点からいくつかの現象に関して検討し、所有形容詞が一部で形容詞的性質を見せ、一部で名詞的性質を見せることにより形容詞と名詞の中間的存在しとして位置すること、すなわち形容詞と名詞は連続性を有するものであることを示す。具体的には、以下 4.1 では固有の性の有無について、4.2 では形態法について、4.3 では程度副詞による修飾の可否について観察することで、所有形容詞が名詞的な振る舞いを見せることを示す。4.4 では生格名詞句の後置の可否について検討し、この点では所有形容詞は形容詞的な振る舞いを見せることを示す。

4.1. 固有の性

(4), (5) でも示されている通り、形容詞においては性、数、格はすべて語形変化上

¹⁸ (11b) において *детскую* に付されているグロス is *child-ADJ.ACC.F* となっている。これは英語に対応の形容詞を見つけることができず、またサクソン属格は本稿では所有形容詞に充てるため *child's-ACC.F* や *children's-ACC.F* と付すことはできないことから、便宜的にこのようにしてある。以降も同様である。

のカテゴリーである一方で、名詞においては数、格は語形変化上のカテゴリーであるが、性は語形変化上のカテゴリーではない。すなわち、名詞には固有の性があり、形容詞にはないと言える。

3で述べたように所有形容詞は名詞と同様に指示性を持ち照応詞の先行詞となり得るが、これは所有形容詞が名詞と同様に固有の性を持つことを示唆する。例えば、(8a) および(10)は文法的であった一方で、(12)は非文法的である。

- (12) a. *Колин_i друг думает, что она_i { умный / умная }.
 Kolya's-NOM.M friend-NOM.M thinks that she-NOM smart-NOM.M smart-NOM.F
 「コーリヤ_iの友人は彼女_iが賢いと思っている。」
- b. Я принесла Надю_i книгу. *Он_i { просила / просил } её
 I-NOM brought Nadja's-ACC.F book-ACC.F he-NOM asked-F asked-M it-ACC
 сегодня вернуть.
 today return-INF
 「私はナージャ_iの本を持ってきた。彼_iはそれを今日返すように頼んだ。」

(12a)における照応詞 *она* 「彼女が」は女性名詞と照応関係を持つ代名詞であり、*Колин* 「コーリヤの」の派生元は男性名詞の *Коля* 「コーリヤ」であるため、*Колин* は *она* の先行詞となることはできない。同様に、(12b)において照応詞 *он* 「彼が」は男性名詞と照応関係を持つため、派生元が女性名詞の *Надя* 「ナージャ」である *Надин* 「ナージャの」は *он* の先行詞となることはできない。

照応詞が文中に顕在化している要素から性の情報を得ていることを前提とする¹⁹のであれば、所有形容詞の派生元の名詞が性の情報を提供しているとは考えられず、(12)で示す事実は、形態的表示はないものの所有形容詞が固有の性を持つことを強く示唆する現象である。この点でも所有形容詞は名詞的な振る舞いを見せていると言える。

4.2. 形態法

所有形容詞はその形態法も他の形容詞とは異なっている。例として(13)に *мамин*

¹⁹ この点はあくまで暫定的な前提である。とはいえ、所有形容詞には派生元名詞の性の情報は顕在化されておらず、所有形容詞が持つ指示性を通じてその外延の自然性を参照することが可能となっているのは確かであるように思われる。この点で、所有形容詞は自然性を持つ名詞と同様に固有の性を持つと考えることができ、名詞と同様の振る舞いをしていると考えることができる。しかし、例えば(8a)においてどのようなメカニズムで *он* 「彼が」の性が決定されているのか、また(12a)がどのようなメカニズムで非文となるのかといった代名詞の性の選択などを含めた広義の一致についての詳細な検討は今後の課題としたい。

「お母さんの」の形態法²⁰を、(14)に *отцов* 「父の」の形態法をそれぞれ挙げる。

(13) *мамин* の形態法 (Timberlake 2004: 128)

	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	<i>мамин</i>	<i>мамин-о</i>	<i>мамин-а</i>	<i>мамин-ы</i>
対格	=主格/生格	<i>мамин-о</i>	<i>мамин-у</i>	=主格/生格
生格	<i>мамин-ого</i>		<i>мамин-ой</i>	<i>мамин-ых</i>
与格	<i>мамин-ому</i>		<i>мамин-ой</i>	<i>мамин-ым</i>
前置格	<i>мамин-ом</i>		<i>мамин-ой</i>	<i>мамин-ых</i>
造格	<i>мамин-ым</i>		<i>мамин-ой</i>	<i>мамин-ыми</i>

(14) *отцов* の形態法 (Timberlake 2004: 128)

	単数			複数
	男性	中性	女性	
主格	<i>отцов</i>	<i>отцов-о</i>	<i>отцов-а</i>	<i>отцов-ы</i>
対格	=主格/生格	<i>отцов-о</i>	<i>отцов-у</i>	=主格/生格
生格	<i>отцов-а</i>		<i>отцов-ой</i>	<i>отцов-ых</i>
与格	<i>отцов-у</i>		<i>отцов-ой</i>	<i>отцов-ым</i>
前置格	<i>отцов-ом</i>		<i>отцов-ой</i>	<i>отцов-ых</i>
造格	<i>отцов-ым</i>		<i>отцов-ой</i>	<i>отцов-ыми</i>

(13) および (14) においてイタリックで示されている語形は名詞の形態²¹ (Шведова и

²⁰ *мамин* の単数男性・中性生格形、および単数男性・中性与格形は、かつては (14) の *отцов* と同様に *-а*, *-у* の語尾を持つ *мамин-а*, *мамин-у* という形態であったが、それぞれ *мамин-ого*, *мамин-ому* に置き換わったとされる (Виноградов и др. 1960: I: 320, Исаченко 1965: 220, Garde 1980: 222, Шведова и др. 1980: 554, Иванов 1990: 296, Comrie 1996: 134, Чернышев 2010: 128 など)。置き換えの過程は 19 世紀を通して観察され (Шведова и др. 1980: 554)、現在では *-а*, *-у* の語尾は固定的語結合 (*устойчивое сочетание*) においてのみ観察される (Зализняк 1977: 63) とされる。

²¹ もちろんこれは通時的に見れば形容詞短語尾の形態と言える (Иванов 1990: 296) が、現代ロシア語において形容詞短語尾形は格に関して曲用しないことを踏まえれば、通時態と共時態を峻別した上で共時的に (13) における *мамин* の単数女性対格形、(14) における *отцов* の単数男性・中性生格形、単数男性・中性与格形、単数女性対格形を統一的に説明する意味で、これらの語形は名詞の形態を持つと判断するのが適切であるように思われる。

др. 1980: 553–555, Timberlake 2004: 128, Pereltsvaig 2007: 74) である。すなわち所有形容詞は形容詞（長語尾形）の形態と名詞の形態が混ざった形態法（смешанное склонение）を持つ。この点でも所有形容詞は一部で名詞的性質を見せる。

4.3. 程度副詞による修飾

形容詞と名詞を分ける基準として通言語的にしばしば用いられるものとして、（程度）副詞で修飾できるかできないかという点がある。すなわち、形容詞は副詞で修飾することができ、名詞はできないというものである。

実際に意味的衝突が起こらないと考えられる場合²²においても、例えば（15）で示されるように、程度副詞 *очень* 「とても」は名詞 *дурак* 「馬鹿」、*пьяница* 「酔っ払い」、*ерунда* 「馬鹿げたこと」の修飾ができない。

- (15) a. *Иван очень дурак.
Ivan very fool
「イワンはとても馬鹿だ。」
- b. *Иван очень пьяница.
Ivan very drunkard
「イワンはとても飲んだくれだ。」
- c. *Это очень ерунда.
This very full_nonsense
「これは実に馬鹿げたことだ。」 (中岩 2022: 167, 174)

一方で、性質形容詞は程度副詞による修飾は可能²³である。（16）では *очень* 「とても」が形容詞 *дурацкий* 「馬鹿な」、*пьяный* 「酔っ払いの」、*ерундовый* 「馬鹿げた」を修飾している。

²² なお、(iv) の通り日本語では程度性を持つ名詞が程度副詞での修飾が可能となる場合がある。

- (iv) a. 彼はとても馬鹿だ。
b. 彼女はとても美人だ。

言語間において形態的差異や統語構造の差異と比較して意味構造の差異は相対的に小さいと考えられていることから、(iv) のような事実を踏まえると、(15) では程度副詞と名詞の間に意味的衝突は起こっていないと考えられ、(15) の非文法性の要因は形態、統語的なものであると考えるのが妥当であると思われる。

²³ 性質形容詞が程度の大小を内在する特徴を表すことを考えれば当然ではある。注5の(ii b)も参照のこと。

- (16) a. Иван очень дурацкий.
Ivan very foolish
「イワンはとても馬鹿だ。」
- b. Иван очень пьяный.
Ivan very drunken
「イワンはとても飲んだくれだ。」
- c. Это очень ерундовый вопрос.
This very nonsensical-NOM.M problem-NOM.M
「これはとても馬鹿げた問題だ。」

しかし、Pereltsvaig (2007) でも指摘されているように所有形容詞および関係形容詞は程度副詞による修飾ができない。(17) で示す通り、所有形容詞の *мамин* 「お母さんの」は *очень* 「とても」で修飾されない。²⁴

- (17) *очень мамины руки
very mom's-NOM.PL hand-NOM.PL
「とてもお母さんの手」 (Pereltsvaig 2007: 78)

同様に (18) で示すように、関係形容詞の *американский* 「アメリカの」、*книжный* 「本の」も *очень* によって修飾されない。²⁵

²⁴ しかしながら、以下 (v) のように *мамин* が *очень* で修飾され得る例も存在する。

- (v) очень мамин сынок
very mom's-NOM.M son-NOM.M
「とてもお母さん子」

本稿では、ここでの *мамин* は「お母さんの」という所有、帰属の意味ではなく「お母さんに懐いている」という言わば性質形容詞的な意味を表していると考え。この仮定の傍証として、この意味の *мамин* が (vi) の通り他の所有形容詞や所有代名詞と共起可能であることから、純粋に所有、所属の意味を表していないと考えられることが挙げられる。

- (vi) { Машин / мой } мамин сынок
Masha's-NOM.M my-NOM.M mom's-NOM.M son-NOM.M
「{マーシャの/私の} お母さん子」

このような所有形容詞が性質形容詞の意味を持つ現象についての記述、検討は今後の課題とする。²⁵ しかしながら、(18a) については、例えば後藤 (2016) でも指摘があるように *американский* を「アメリカ的な」と解釈する場合は文法的となる。同様に (18b) についても、(vii) のように *книжный* を「本好きな、非現実的な」や「文語的な」で解釈する場合には *очень* による修飾が認められる。

- (18) a. *очень американское вторжение в Ирак
 very American-NOM.N invasion-NOM.N into Iraq
 「とてもアメリカのイラクへの侵攻」 (後藤 2016)
- b. ??? очень книжные шкафы
 very book-ADJ.NOM.PL shelf-NOM.PL
 「とても本 (の) 棚」 (宮内 2022: 222)

以上の通り、程度副詞による修飾という観点で見ると、(関係形容詞と) 所有形容詞は名詞的な振る舞いを見せると言える。

4. 4. 生格名詞句による後置修飾

名詞は生格名詞句によって後置修飾され得る一方で、形容詞は生格名詞句によって後置修飾されない。実際に (19)²⁶ で示すように名詞の *мама* 「お母さん」、*сосед* 「隣人」は生格名詞の *Колу* 「コーリヤの」、*Маши* 「マーシャの」で後置修飾され得るが、(20)

-
- (vii) a. очень книжный человек
 very bookish-NOM.M person NOM.M
 「とても {本好きな/非現実的な} 人」
- b. очень книжные выражения
 very bookish-NOM.PL expression-NOM.PL
 「とても文語的な表現」

本稿では、このような意味の *американский* や *книжный* は性質形容詞化していると考える。なお、関係形容詞と性質形容詞の区別の曖昧性については注 5 も参照のこと。上記の仮定が正しい場合、例えば (18a) の *американский* を「アメリカ的な」と解釈する、すなわち *вторжение* 「侵攻」の様態として解釈するなら、その動作主として (他の) 関係形容詞を付加できることが予測されるが、(vii) の通りこの予測は正しい。

- (viii) (*очень) французское (очень) американское вторжение в Ирак
 very French-NOM.N very American-NOM.N invasion- NOM.N into Iraq
 「(とても) フランスの (とても) アメリカ的なイラクへの侵攻」

(viii) で示すように *американский* を「アメリカ的な」で解釈する場合には、*вторжение* の動作主を例えば関係形容詞 *французский* 「フランスの」で表現することが可能であり、このことは「アメリカ的な」を意味する *американский* が性質形容詞化していることの傍証となる。なお、(viii) においてやはり *французский* は *очень* による修飾が認められない。「アメリカ的な」を意味する *американский* や「本好きな、非現実的な、文語的な」を意味する *книжный* は本稿での仮定の通り性質形容詞化している可能性もあるが、そもそも関係形容詞自体がより形容詞的なものからより名詞的なものへの連続体を成している可能性もある。この点をより詳細に明らかにするためには各語の意味と振る舞いととの相関をより精密に記述する必要があるが、これは今後の課題としたい。

²⁶ なお、グロスにおける「[]」は構成素構造を明示するために表記している。以降も必要に応じて同様の表記を用いる。

で示すように形容詞 *материнский* 「母らしい」、*соседский* 「隣人の」は *Коли*, *Маши* によって修飾することはできない。²⁷

- (19) a. руки мамы Коли
hands [mother-GEN Kolya-GEN]
「コーリヤのお母さんの手」
- b. дом соседа Маши
house [neighbor-GEN Masha-GEN]
「マーシャの隣人の家」
- (20) a. *материнские Коли руки
[motherly-NOM.PL Kolya-GEN] hand-NOM.PL
「コーリヤの母らしいの手」
- b. *соседский Маши дом
[neighborly-NOM.M Masha-GEN] house-NOM.M
「マーシャの隣人の家」

所有形容詞の場合にも生格名詞句による後置修飾はできない。(21) で示すように、所有形容詞 *мамин* 「お母さんの」、*соседкин* 「隣人の」を生格名詞の *Коли* 「コーリヤの」、*Маши* 「マーシャの」で後置修飾することはできない。²⁸

²⁷ (ix) で示すように、ロシア語においては修飾する形容詞的要素と被修飾語が必ずしも隣接している必要はないため、非文法性の要因が修飾語と被修飾語の隣接性の点にあるわけではない。

- (ix) первый в Японии университет
[first-NOM.M in Japan] university-NOM.M
「日本の最初の大学」

²⁸ しかしながら、以下 (x) のような一見すると生格名詞句が所有形容詞を修飾しているように見受けられる例も報告されている。

- (x) a. тёти Машины дети
[aunt-GEN Masha's-NOM.PL] child-NOM.PL
「マーシャおばさんの子供たち」 (Pesetsky 2013: 112)
- b. с дяди Мишиным сыном
with [uncle-GEN Misha's-INS.M] son-INS.M
「ミーシャおじさんの息子と共に」 (Розенталь 1998: 146)
- c. Прасковьи Ивановни муж
[Praskovya-GEN Ivanovna's-NOM.M] husband-NOM.M
「プラスコヴィヤ・イヴァノヴァの夫」 (Pereltsvaig 2007: 78)

- (21) a. *мамины Коли руки
 [mom's-NOM.PL Kolya-GEN] hand-NOM.PL
 「コーリャのお母さんの手」 (Pereltsvaig 2007: 78)
- b. *соседкин Маши дом
 [female_neighbor's-NOM.M Masha-GEN] house-NOM.M
 「マーシャの(女性)隣人の家」

この点で、所有形容詞はその他の形容詞と同様の振る舞いを見せる。

5. おわりに

本節では、本稿全体のまとめと今後の課題を示す。5.1 では、本稿全体をまとめ、結論を述べる。5.2 では、今後検討していく必要がある課題とその研究の方向性を述べる。

5.1. 本稿のまとめ

本稿では、2において述べたように、形容詞と名詞は別の品詞であること、品詞分類には形態的、統語的、意味的な基準が想定されていることを前提とし、3で所有形容詞が代名詞の先行詞として機能することを指摘した上で、所有形容詞は指示性を持つという意味機能的観点からその他の形容詞と名詞の中間的存在であること、すなわち形容詞と名詞に連続性が認められることを示した。さらに、4では形態的、統語的観点からも検討を加え、所有形容詞が時に名詞的に振る舞い、時に形容詞的に振る舞うことを指摘し、形態的、統語的な観点からも形容詞と名詞は連続性を有し、所有形容詞がその中間的存在であると言えることを示した。

以上本稿で記述した諸現象をまとめると (22) の通りとなる。

このような例については、Розенталь (1998: 146) は俗語 (просторечие) であると指摘しており、Pereltsvaig (2007) は「一部の親族名称 + 固有名詞」および「父称 + 名」という結合においてのみ許されることを指摘している。これらは、例えば *двухсотый* 「200 番目の」の前部要素が *двух-* という生格形と同形となっているのと同様に、実質的に単一の複合語のように分析され得る可能性があると思われるが、データを拡充して今後より詳細に検討していく必要がある。

(22) 形容詞と名詞の連続性²⁹

	性質形容詞	関係形容詞	所有形容詞	名詞
生格名詞句の後置修飾	A	A	A	N
形態法	A	A	A/N	N
固有の性	A	A	N	N
指示性（先行詞となるか）	A	A	N	N
程度副詞による修飾	A	N	N	N

(22) において、「A」は各カテゴリーが当該の基準において形容詞的に振る舞うことを、「N」は名詞的に振る舞うことを示す。「A/N」は形容詞的振る舞いと名詞的振る舞いが混ざっていることを示す。(22) で示すように、所有形容詞は一部で形容詞的に振る舞い、一部で名詞的に振る舞うことから、名詞と形容詞の中間的存在であることがわかる。このことから、形容詞と名詞には連続性が認められると結論付けられる。

5.2. 今後の課題

ロシア語における形容詞と名詞の連続性をより詳細に明らかにするためには、(22) で示した表を精緻化していく必要がある。その際、各カテゴリーを細分化しその詳細を記述していくこと（つまり、表の列を増やすこと）、および本稿では扱っていないより多くのパラメータを用いて各カテゴリーの振る舞いを記述していくこと（つまり、表の行を増やすこと）という二つの方向性があるだろう。本節では、特に前者に関して、いくつかの具体的な課題と検討の方向性を述べる。

まず、本稿において記述の対象としていない接尾辞 *-uï* を持つ（所有）形容詞については、今後記述、考察していく必要がある。*-uï* を持つ（所有）形容詞も (13) に示した *матин* 「お母さんの」と同様に主格と対格で名詞的な形態を持つ。その点で名詞的な振る舞いを見せ、他の形容詞とは性質が異なっている。一方で、*-uï* を持つ（所有）形容詞が指示性を持たないのであれば、その指示性の観点から接尾辞 *-ов*、*-ин* を持つ所有形容詞に比べて名詞的性質が弱く、形容詞的性質が強いと言える。よって、*-uï* を持つ（所有）形容詞は (22) において関係形容詞と所有形容詞の間に位置づけられることが示唆される。

また、性質形容詞内部における細分化も検討せねばならない。長語尾、短語尾の双方

²⁹ (22) における最左列の基準について、「生格名詞句の後置修飾」については 4.4 で、「形態法」については 4.2 で、「固有の性」については 4.1 で、「指示性（先行詞となるか）」については 3.2 および 3.3 で、「程度副詞による修飾」については 4.4 でそれぞれ記述、検討した。

を持つか、比較級、最上級を形成できるか、*-ость* 等で名詞を派生できるかといった基準を追加することで、性質形容詞というカテゴリーに属す具体的な語彙の検討が可能となる。これにより、性質形容詞内部においても連続性が認められる可能性がある。

さらに、名詞についても細分化できる可能性がある。例えば、形容詞型の名詞が (22) においてどのように位置づけられるのかといった検討が必要となる。形容詞型の名詞は少なくとも形態法上では形容詞的な振る舞いを示す点で、他の名詞よりも形容詞的性質が強いと考えることができ、(22) において所有形容詞と名詞の間に位置づけられよう。

加えて、いわゆる総性名詞や無性 (asexual) の名詞における固有の性の有無という点も今後は考察の射程に入れていく必要がある。例えば、総性名詞が指示対象の自然性に応じて振る舞いが変わることを踏まえ、総性名詞は固有の性を持たないと考えるならば、総性名詞はその他の名詞よりも名詞的性質が弱いと考えられるため、(22) において所有形容詞と名詞の間に位置づけられるかもしれない。³⁰

今後は、ロシア語における形容詞と名詞の連続性をより詳らかにするために、上記の方向性でより緻密な記述を行い (22) を精緻化していくことに加え、形容詞が名詞と同様に θ 役割を持ち得るのか³¹ といった理論的課題、および照応や指示性そのものに関する理論的検討も含めて、記述的にも理論的にもより多角的に検討する必要がある。

引用文献一覧

Валгина Н. С., Розенталь Д. Э., Фомина Н. И., В.В. Цапкевич. Современный русский язык. изд. 3-е. М.: Высшая школа, 1966.

Виноградов В. В., Истрина Е. С., Бархударов С. Г. Грамматика русского языка. В 2 томах. М.: Академия наук СССР, 1960.

Виноградов В. В. Русский язык: Грамматическое учение о слове. М.: Государственное учебно-педагогическое издательство министерства просвещения РСФСР, 1947.

Греч Н.И. Практическая русская грамматика. СПб.: Типография императорского воспитательного дома, 1827.

³⁰ 例えば光井 (2014) が指摘するように、総性名詞や無性の名詞は各語ごとに性に関して異なる振る舞いを見せる面があることから、これらの名詞の内部についてもさらに細分化できる可能性もある。

³¹ 例えば、所有形容詞は出来事名詞の項として機能しうるが、このことは形容詞が θ 役割を持つ可能性を示唆している。また、宮内 (2022) では関係形容詞も所有形容詞と同様に出来事名詞の項として振る舞う可能性を指摘しており、この点も形容詞と名詞の連続性を明らかにするためのパラメータとして用いることができると考えられる。

- Зализняк А. А.* Грамматический словарь русского языка: Словоизменение. М.: Русский язык, 1977.
- Иванов В. В.* Историческая грамматика русского языка. изд. 3-е. М.: Просвещение, 1990.
- Исаченко А. В.* *Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким: Морфология* I. изд. 2-е. Братислава.: Издательство словацкой академии наук, 1965.
- Карпов А. К.* Морфология современного русского языка: Учебное пособие. изд. 3-е. Нижневартовск.: Издательство Нижневартовского государственного университета, 2019.
- Кобякова Т. И.* *Стилистика русского языка и культура речи (сфера профессиональной коммуникаций)*. Уфа: Уфимский государственный университет экономики и сервиса, 2013.
- Ломоносов М. В.* Российская грамматика Михайла Ломоносова. СПб.: Императорская академия наук, 1755 (Reprinted 1972, Leipzig).
- Молошина Т. Н., Николаева Т. М., Свешникова Т. Н.* План выражения категорий посессивности // Категория посессивности в славянских и балканских языках / Под ред. Вяч. Вс. Иванова. М.: Наука, 1989. С. 112-215.
- Панова Г. И.* Морфология русского языка: Энциклопедический словарь-справочник. М.: КомКнига, 2010.
- Пешковский А. М.* Русский синтаксис в научном освещении. изд. 7-е. М.: Государственное учебно педагогическое издательство Министерства просвещения РСФСР, 1956.
- Розенталь Д. Э.* Практическая стилистика русского языка. М.: АСТ-ЛТД, 1998.
- Розенталь Д. Э., Джанджакова Е. В., Кабанова Н. П.* Справочник по правописанию, произношению, литературному редактированию. М.: Московская международная школа переводчиков, 1994.
- Чернышев В. И.* Правильность и чистота русской речи: Опыт русской стилистической грамматики. изд. 4-е. М.: Издательство ЛКИ, 2010.
- Шанский Н. М., Тихонов А. Н.* Современный русский язык: Словообразование, морфология. изд. 2-е. М.: Просвещение, 1987.
- Шанский Н. М., Тихонов А. Н., Филиппов А. В., Небыкова С. И., Изаренков Д. И.* Современный русский литературный язык. изд. 2-е. Л.: Просвещение, 1988.
- Шведова Н. Ю.* Грамматика современного русского литературного языка. М.: Наука, 1970.
- Шведова Н.Ю., Арутюнова Н.Д., Бондарко А.В., Вал. Вас. Иванов, Лопатин В.В., Улуханов И.С., Филлин. Ф.П.* Русская грамматика: Том I. М.: Наука, 1980.
- Янко-Триницкая Н.А.* Русская морфология. М.: Русский язык, 1982.

- Babyonyshev, Maria. “The possessive construction in Russian: A crosslinguistic perspective,” *Journal of Slavic Linguistics* 5, no. 2 (1997), pp. 193-233.
- Chomsky, Noam. *Lectures on government and binding*. (Dordrecht: Foris, 1981).
- Comrie, Bernard, Gerald Stone, and Maria Polinsky. *The Russian language in the twentieth century*. (Oxford: Calarendon Press, 1996).
- Corbett, Greville G. “Numerous squishes and squishy numerals in Slavonic,” in Bernard Comrie, ed., *Classification of grammatical categories*. (Edmonton: Linguistic Research, 1978), pp. 47-73.
- Croft, William. *Typology and universals*. (Cambridge: Cambridge University Press, 2003).
- Garde, Paul. *Grammaire russe: Phonologie, morphologie*. (Paris: Institut d’Etudes Slaves, 1980).
- Lancelot, Claude, et Antoine Arnauld. *Grammaire générale et raisonnée contenant les fondemens de l’art de parler, expliqués d’une manière claire et naturelle*. (Paris: Pierre le Petit, 1660).
- Lyons, John. *Semantics*. (Cambridge: Cambridge University Press, 1977).
- Miyauchi, Takuya. “How to introduce instrumental agents: Evidence from binding in Russian event nominal phrases,” in Franc Marušič, Petra Mišmaš and Rok Žaucer, eds., *Advances in Formal Slavic Linguistics 2017* (Berlin: Language Science Press, 2020), pp. 179–204.
- Pereltsvaig, Asya. “The universality of DP: A view from Russian,” *Studia Linguistica* 61, no. 1 (2007), pp. 59-94.
- Pesetsky, David. *Russian case morphology and the syntactic categories*. (Cambridge, MA: MIT Press, 2013).
- Robins, Robert. H. *A short history of linguistics*. London. (New York: Longman, 1997).
- Townsend, Charles E. *Russian word-formation*. (New York: McGraw-Hill Book Company, 1968).
- Timberlake, Alan. *A reference grammar of Russian*. (Cambridge: Cambridge University Press, 2004).
- 後藤雄介「ロシア語における民族形容詞の統語的特徴をめぐって」日本ロシア文学会第66回全国大会、2016年10月23日。
- 中岩諒「「不思議な」 больше の用法」『スラヴ文化研究』20号、2022年、157-177頁。
- 匹田剛「ロシア語の文法における連続性について」中澤英彦、小林潔編『ロシア語学と言語教育』2007年、5-26頁。
- 光井明日香「ロシア語におけるいわゆる総性名詞について」『スラヴ文化研究』12号、2014年、118-153頁。
- 宮内拓也「ロシア語における名詞句の統語構造と意味解釈の研究：顕在的な冠詞がない言語における名詞句の統語構造の問題によせて」東京外国語大学、2022年、博士論文。

Continuity between Adjectives and Nouns in Russian: With a Focus on Possessive Adjectives as Antecedents

Takuya MIYAUCHI

Part-of-speech classification is based on morphological, syntactic, and semantic criteria. However, the boundaries between parts of speech are not necessarily discrete, and such parts show continuity, with intermediate items often being pointed out. This article discusses the continuity between adjectives and nouns in Russian, with particular attention to the phenomenon of possessive adjectives functioning as antecedents of pronouns. It shows that possessive adjectives, which are classified as adjectives in terms of part-of-speech classification, behave more like nouns than other adjectives in that they can be the antecedents of pronouns, and that they are positioned between other adjectives and nouns from a semantic-functional perspective. This suggests a continuity between adjectives and nouns. Furthermore, with some consideration of other morphological and syntactic phenomena, the article demonstrates that adjectives and nouns do not have strictly discrete boundaries but have continuity through possessive adjectives, which are in an intermediate position between them.

Keywords: Russian, possessive adjectives, adjectives, nouns, continuity, reference, anaphora